

手打ちにしか、半殺しにしか

昔、旅人があったと、夜になったが近所に家がない。山道にさしかかかって心配しながら歩いていたら、ぼやっと灯が見える。家があってよかったと行ってみると、粗末な小屋にじいさんとばあさんがいなど。わけを話してひと晩

「泊めてもれえでー」と頼んだら

「こーだどこでよがったら泊める」っていうので厄介になることにしたと。

ところが、寝てうつうつしてると、とっしよりたちのひそひそ話が耳に入ったと。

「ばあさん、あしたの朝は手打ちにしか、半殺しにしかーそしつとばあさんが

「半殺しだらおれにでもできつから半殺しにすべいー」さあ大変、旅人はわが耳を疑ったが、たしかにそう話した。ひとのいいとっしよりたちと思つたら大間違ひ、旅人を泊めては殺して金を取る恐ろしい鬼夫婦か。

朝までいたら殺されつちもう、と、とっしよりたちの寝

静まんのを見計ってこっそり逃げ出したと。

慣れねえ山道を夜通し歩いて明け方、山を通り抜けたら茶店があったと。そこで休んで、ゆんべのことを語ったら茶店の人が笑ってんだと。

「お前さん、この辺で手打ちっていうのは「そば」のこと、半殺しっていうのは「ぼた餅」のことだ。

「珍しい人にごつつあうしようっていうおもいやりだった」と聞いてまたびっくり、引返してあやまんなくてなんねえと戻ってみつと、とっしよりたちがあきれ顔、ゆんべの旅人どうしたのか、まさか狐や狸のいたずらでもあんめえし、と語ってだどこだったっていう話。

